

1 学校のミッション (使命、存在意義)
 高度な知識と幅広い教養を培う県立中等教育学校として、課題解決型学習等に取り組み、主体性や協調性、粘り強い心等を高める6年間の一体的な学習活動や体験活動等を通して、地域社会や国際社会を牽引するリーダーとして、その発展に貢献する人材の育成を目指す。

2 ミッションの追求を通じて実現しようとするビジョン (目指す姿)
 ・高い目標を持ち、その目標の実現に向けて主体的に取り組むことができる生徒。
 ・協調性を備え、課題の解決や共通の目的達成に向けて協働できる生徒。
 ・豊かな教養と品性を備え、持続可能な社会の構築に寄与するリーダーとして活躍できる生徒。

3 現状分析 (前年度の評価と課題を踏まえて)
 1 教育活動
 6年一貫の中等教育学校として、生徒の自己実現を叶える丁寧な学習指導と進路指導及び特色ある教育課程は、地域のみならず全国からも注目を集めている。グローバル化が進む、変化の激しい社会を生き抜くため、生徒が新しいことに果敢に挑戦し、成功から得られる自信や失敗から立ち直る逞しさを身につけられるよう、校内外における探究的・体験的な学びを支援する役割が求められる。
 2 学校運営
 教職員それぞれの個性や専門性、得意分野が十全に発揮されるとともに、教科、学年、分掌において、互いに補助・補完しながら、協働して業務を遂行できる学校とする。管理職・ベテラン・中堅・若手が、分け隔てなくコミュニケーションをとることができる支持的職場風土を醸成し、教職員一人一人のやりがいと学校全体の組織力がともに高まるような「チーム大安寺」をつくる。

4 中長期的な目標
 本校は、特に近年の進学実績が注目され、入学者選抜を経た優秀な生徒が、県内広い地域から通学している。多くは意欲的に学習や諸活動に取り組み、自己の成長を実感することができているが、中には高い能力を持っているにもかかわらず、謙虚過ぎたり自信に乏しかったりする生徒もいる。入学した全ての生徒が、自らの適性や潜在的な能力に気づき、様々な場面でそれが主体的に発揮できるよう、教職員は伴走者となって仕掛けと支援を行う必要がある。生徒が学びの主体として、校内外の多様なフィールドで、自ら考え行動する自己決定の場をできるだけ多く創出していく。そのため、本校が大切にしてきた「師弟同行」の理念を継承しつつ、これまで行ってきた教育活動を「教養教育 (Culture Education)」、「生き方教育 (Career Education)」、「市民性教育 (Citizenship Education)」(3C教育)の視点で捉え直し、体系的な指導を展開する。

5 自己評価		達成状況の診断・評価			
評価領域	重点目標	課題解決に向けての取組 (具体的方策)	評価基準	達成度 (中間)	達成度 (最終)
教養教育	生徒の教養と品格、自尊感情を育てる。	(教務課) 図書館の利用、活用を促進する。	生徒の本の貸し出し冊数を、令和6年度実績(18533冊)と同程度以上とする。 A 昨年度比+10%以上 B 昨年度と同程度 C 昨年度比-10%以下	B	A
		(進路指導課) 高い進路目標を持ち、それに向けて主体的に取り組むことのできるよう、進路学習の機会を設け、進路情報の提供をする。	・6年生の進路希望において、難関大学の志望者が学年の A 50%以上 B 40%以上50%未満 C Bに満たない ・6年生の11月マーク模試5教科総合で、国公立大学合格ライン(全国偏差値52以上)の生徒の割合が、 A 80%以上 B 70%以上80%未満 C Bに満たない		A
		(教育相談室) 生徒が自らの強みを主体的に発揮していけるよう、年1回ずつ、自身の自尊感情を高めることを目的とした生徒対象の研修と、その支援に寄与する教職員対象の研修を実施する。	研修後のアンケートで、講演内容が今後「役立つと思う」「まあ役立つと思う」の評価が全体の A 80%以上 B 60%以上80%未満 C Bに満たない	A	A
生き方教育	生徒の自立と社会参画、自己開拓の精神を育てる。	(生徒課) 生徒会執行部を中心として、生徒自らが主体的に創造する新しい白鷺祭の企画・運営を支援する。	生徒課が作成する白鷺祭後実施の生徒対象アンケートによる満足度、関わり度を評価基準とする。さらに、生徒会執行部員の振り返りを参考とする。 A 90%以上 B 80%以上 C Bに満たない	B	A
		(進路指導課) 各学年で外部講師を招き、進路講演会を実施するとともに、前期課程では、1年次「プロフェッショナルに聴く」、2年次「チャレンジワーク」を通して保護者や企業との連携を図る。	それぞれ参加生徒にアンケートを行い、肯定的評価が A 80%以上 B 60%以上80%未満 C Bに満たない		A
		(グローバル教育推進室) 異文化理解や国際社会に関わる視野を広めるために、生徒が外部人材との交流や専門家による講演に参加する機会を積極的に持つ。	交流や講演後に、参加生徒にアンケートを行い、満足度が A 80%以上 B 60%以上80%未満 C Bに満たない	A	A

6 学校関係者評価	
取組状況に関する意見・要望等	評価
・全体的に高い数値目標を掲げているもののその目標を達成できており、日頃から充実した教育活動が展開されているものと考え。 ・図書館の利用状況について、量的な可視化だけでなく、どれだけインターネットへのアクセスを含め、良質なコンテンツに触れているかという質的な面も追跡するとよい。	A
・取組自体はよくできているが、課題解決に向けての取組(具体的方策)が重点目標に対して直結していない部分があるので、次年度は重点目標に沿った取組を意識してほしい。 ・進路講演会について、実施した成果や手応えを検証し、今後につなげてほしい。 ・入国管理局による講演会を実施したことは、内なる国際化を生徒に意識させるという点において非常に有益である。	A

市民性教育	生徒の公共性と協働性、民主主義を育てる。	(生徒課) 生徒会執行部、各種委員会が主体となり、各種行事を通して、地域の方々と交流する機会を創出する。	地域の方と交流する行事について A 年間3回以上の活動を実施した B 年間2回の活動を実施した C 実施回数が年間1回以下である	A	A	7月下旬に香川大医学部生を招き「生徒対象救急処置講習会」を実施。白鷺祭では、北長瀬本町町内会の方に案内を出し、地域の方に参加いただいた。また、宝島保育園の園児30名が文化の部に参加してくれたことで、世代を超えた交流の場ももてた。開かれた学校を目指し、白鷺祭文化の部一般公開など地域との連携を深める。	・地域との交流について、交流の広がりや深まりを意識し、今後も地域に愛され、地域を愛する生徒を育成してほしい。 ・道徳の評価シートの見直しについて成果が上がっていることについて、他の教科へも波及するような取組をするよいのではないか。	A
		(厚生課) 環境保全への意識を高めるため、教室等での再資源化可能なゴミの分別・回収を、美化委員会の活動等を通して、促進する。	教室等での再資源化可能なゴミの分別・回収が A よくできている B ほぼできている C あまりできていない	B	A	今年度からプラスチック類を中心とした再資源化可能なゴミの分別・回収への取組を強化したが、美化委員からの呼びかけやポスターの掲示により、分別・回収は概ねできていた。次年度以降も取組を継続していきたい。		
		(道徳教育推進委員会) 問題解決型の道徳授業を中核に据えた実践とともに、教育活動全体での道徳教育を推進していく。	道徳アンケートによる肯定的な回答が A 90%以上 B 70%以上90%未満 C Bに満たない	B	A	前期生徒対象の道徳アンケートおよび後期課程を含む全校アンケートでは、全項目で肯定的評価が概ね90%に達している。教職員を対象とした「指導と評価の一体化」をテーマとする道徳研修では、教科書改訂に伴い評価シートの見直しを行ったことで、生徒の道徳性の伸長を全教職員で捉えようとする意識が高まっている。また、保護者参加型の道徳授業の実施など、道徳教育の充実を推進する体制が有効に機能している。		
DXハイスクール	デジタルを活用した文理横断的・探究的な学びを強化し、数理・データサイエンス・AIを活用した実践的な学習を充実させる。	(ICT管理室・学習指導委員会) 部活動や委員会活動などを中心とした活動から、実践的な活用ができる人材を増やしていく。	DX関係機器の使用団体が A 3団体以上 B 2団体以上 C Bに満たない	B	B	メディア部、白鷺祭実行委員の動画編集の活動以降、使用した団体はないが、生徒希望者対象の生成AI講座や有志教師で3Dプリンタを使ってみるなどの活動を行った。次年度以降の活用につなげていきたい。	・教員向けの講習会について、実施した回数よりも講習後の気づきなどに着目することの方が重要である。 ・DXハイスクールの取組について、授業互見実施の際にテーマの1つとして掲げると、取組が広がるのではないか。	B
		(教務課) 外部人材を活用して、生徒に対して「探究活動を深化させる」実践的な講習会を行い、数理分野やデータサイエンス、AIへの興味関心を高める。	研修会後のアンケートで興味関心が、「とても高まった」「高まった」の評価が全体の A 80%以上 B 60%以上80%未満 C Bに満たない	A	A	サイエンス部のPC班の生徒とAIの使用に対して興味を持つ有志の生徒向けの講習会を行った。参加した生徒は、90%以上の興味関心が高まったと回答した。年度末に向けて、更に企画したり、教員向けの講習会も実施したい。		
		(教務課) 外部人材を活用して、教員に対して生徒に数理分野やデータサイエンス、AIについて指導する手法についての講習会を行う。	教員向け講習会の回数が A 5回以上 B 3回～4回 C Bに満たない	C	B	教員向け講習会は、1度実施した。外部人材の日程がなかなか本校の希望と合わず、2回目は、年度末までに実施できるよう企画している。内容は、AIを使用した教材準備とする予定である。		
業務改善	個の視点と組織の視点から業務を見直し、効率的な学校運営を行うことで、教職員にとって働きがいのある職場にする。	(教務課) 業務改善を積極的に行い、令和7年度重点目標を達成できるだけの時間的余裕を生み出す。	時間的な余裕を生み出すことができた改善が A 3つ以上あった B 2つあった C Bに満たない	B	A	授業参観や学級・学年懇談会への参加者数調査をやめた。また、1年生のチャレンジタイムの実施に関して変更を加え、弾力的な運用ができるようにした。また、入学手続きについては個別ではなく、ある程度まとめて行えるように変更した。	・教員が業務以外の趣味などを楽しむことは、教養の幅を広げ、それを生徒にも還元できるはずなので、時間的余裕を持って働けるようにしてほしい。 ・学校評価アンケートの「相談できる雰囲気」の肯定回答率が向上している点が高く評価できる。	B
		(管理職) 従来から取り組んでいる業務や行事について、例年通りでよとせず効率化を追求する意識を持つとともに、新たな取組を計画する際はスクラップアンドビルドの視点を持って進める。また、定時退校日の着実な運用に向けた取組を図る。	1 学校評価アンケート「組織の視点及び個の視点から業務の効率化を図り、部活動を含む1か月あたりの時間外業務時間を80時間以内にするよう組織的に取り組んでいる」の問いに対して、「当てはまる」、「やや当てはまる」と回答した割合が A 75%以上 B 60%以上75%未満 C Bに満たない 2 定時退校日（各自で設定した日）の実施状況 A 90%以上 B 70%以上 C Bに満たない 3 効率化によって生徒と向き合う時間を持つことができた（観察や面談での聞き取りにより評価する）。	B	B	・1の肯定回答率 第1回：61%、第2回：69% ・2について、定時退校日を設定できなかった。 ・12月までの月あたり超過勤務時間43.8時間（昨年度47.1時間） ・12月までの月80時間以上超過勤務者のべ55人（昨年度72人） ・12月までの年次休暇の申請件数1179件（昨年度1019件） 項目3「効率化によって生徒と向き合う時間を持つことができた」について、業務の簡略化や生成AIの活用により効率化が図られている部分はあるが、それとは関係なく生徒と向き合う時間を優先して確保しようと努めている者が多い。		

7 学校評価の総括（取組の成果・次年度への改善策）

【取組の成果】

- ・業務効率化の視点だけでなく、授業改善、新規行事の創設、白鷺祭体育の部など必要に迫られたものを含め、例年通りの内容を見直す動きが多く場面で見られた。
- ・白鷺祭をはじめとする行事や各種講演会において、体験的な学び、生徒が主体となって運営する場面を充実させることができた。
- ・生成AIを活用した授業や会議資料のまとめ、可動式超短焦点プロジェクタの活用など、新たなICT活用について広がりが見られた。

【次年度への改善点】

- ・定性的指標も導入できるよう、日頃の取組を評価することや、現在、単発の行事や講演会のアンケート集計で評価基準を設定しているものに、実施までの過程や振り返りの記述も見取るようにしていきたい。
- ・新たな取組を導入する際には入念に準備をすることで共通理解を図ってから進めるようにしたい。